

---

# 執事様の恋心

櫻塚森

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

執事様の恋心

### 【Nコード】

N5942T

### 【作者名】

櫻塚森

### 【あらすじ】

日本、いや世界有数の財閥に忠誠を誓う笠原家。その当主の利家は古賀家の執事だった。そんな彼に一目惚れした羽鳥とのラブストーリー。別サイトからの転記となります。多サイトのスピンオフなので、分かりにくいところもあると思いますが、そうならないようにがんばります。

日本でも有数の資産家である古賀家。  
その古賀家に代々仕える家系がある。  
それが笠原家だ。

当主を影から守り、時には広報の役目も担う、古賀家にとっては切り離す事のできない一族である。

古くは、江戸末期、笠原家の先祖が古賀の先祖に受けた一宿一飯の恩、そこから始まったと言われている。

用心棒として勝手に古賀の当主に従ったとか・・・。

「先祖は、古賀の若様の人柄に大層魅力を感じたようで、古賀の当主にしてみれば、他愛もない施しだったと思われませんが、彼にとっては生死を分けるものだったのでございましょう。以来我が笠原家は古賀家から離れてはおりません。」

ある日ふと尋ねた若様、古賀雷紋に利家は答えた。

彼はこの若き次期当主をとて大切に思っている。

「古賀の家から、離れたいと思った者だっていたらどう？」

優雅な身のこなしで紅茶をカップに注ぐ。

「左様でございますね、以前には、雷紋さまの仰られるようにその主従関係がイヤで、古賀家を離れようとした者もいたと聞き及んでおりますが、その者は不幸な死を遂げたとか。」

先祖の話をするときの利家は嬉しそうだった。

笠原利家は、古賀家の執事だ。

彼の朝は、日の出よりも早くに始まる。

「利家さま、おはようございます。」

彼の妻である羽鳥は、彼よりも早く目を覚まし、窓を開け空気を入れ替え、朝食の用意をする。

夫である利家が、和食派であることから、いつも用意しているのは素朴な家庭料理で、利家は妻の作った食事を黙々と食べる。

妻の羽鳥は古賀家の家政婦長だ。

笠原家の朝食を作り、利家が食事をし始めるのを確認すると併設する古賀の邸宅に食事を作りに行くのだ。

とある屋敷でメイドとして働いていた羽鳥は、客として訪れた古賀彩紋と利家に初めて会った。

他のメイドや家のものは、見目麗しい彩紋に目を奪われていたが、羽鳥は利家の方に一目ぼれをしてしまった。

古賀彩紋の滞在中に何としても利家に近付きたいと思った羽鳥は、あの手この手で利家の印象に残ろうと頑張り、別れの際にプロポーズしたのだった。

両家の主人達を含め、皆が硬直した。

その中で利家だけが平然としていたが、彩紋は面白がった。

「面白い人だね、」

まだ、高校生の彩紋は相手の主人に耳打ちをした。

その後、羽鳥の家の事情と彼女が学業も平行して働きたいと思ったこと、古賀の家で家政婦を探しているとの話が合い、その条件を確認した上で彼女は面接を受けた。

その面接には、古賀家の次期党首である彩紋と笠原家一同がそろっていた。

「働きながら、学業にもこなしたいそうですね。」

利家の父であろう人からの質問に答えて行く。

「羽鳥は、面白い人だから、採用してみたら？」

彩紋の一声。

かくして、羽鳥は古賀家へとやってきたのだった。

「利家は、家に尽くす事ばかりできつとお嫁さんなんて欲しいとは思っちゃじゃないからね。父上とも話していたんだ。利家にプロポーズしてくれる娘さんはいないかなって。」

彼女を雇った事に対して意見してきた利家に彩紋とその父親である

現当主古賀重紋はにこやかに言った。

くじく

利家の両親も彼の将来が不安だった。

良い成績で大学を出て、古賀彩紋付きの従者になった息子だが、冷徹な雰囲気を持っていて、憧れられるほどの容姿をしながら、仕事以外に興味をもちととしていないのだった。

付き合つてと言ってくる相手は五万といた。

けれど、彼が古賀家を優先しつづけることに我慢ができる人はいなかった。

彼が一番に考えるのは、自分のことでも、家族のことでもなく、古賀のことである。

1人でいれば、気楽で。

誰に気兼ねもなく古賀家のために働くことができる。

結婚などしなくていいと彼は考えていた。

「だからといって……。」

利家は、古賀の家を守る笠原家の1人息子として次の代をつくることは義務だと考えていた。

聡明で大人しい相手ならと思っていたが、羽鳥は、よく働くが、にぎやかでドジだった。

彼女が屋敷に来てから自分の仕事が増えたようにも思う。

「チヨ―真面目、堅物な利家には、羽鳥みたいな子が似合うと思うよ。」

人事だと思つて彩紋は簡単に言っていると利家は思っていた。

「羽鳥は努力の人だよ？利家。」

古賀当主にも言われ、改めてため息を吐く。

羽鳥は確かにドジだが、同じ失敗を繰り返したりはしなかった。冷たいといわれる利家と他のメイドとの間にも立つてくれる。

現家政婦長の母親は彼女の根性に次々と自分の仕事を教えているのだ。

「あの〜利家さま？」

ある日、息抜きをしていた彼の元に羽鳥はやってきた。

「よいのです、」

「？」

「押しかけた私のことなど、気になさらず、好きな方を選んでください。利家さまのそばにいられたらそれでよいのです。」

泣きそうな顔をして言って来た羽鳥に利家は頷いた。

その顔に何も感じなかったと言えば嘘になる。

正直に時の流れに身を任せるのも悪くない。

利家はそう思った。

「家のためには、あなたと結婚するしかないらしい。」

そう言っただけで利家は彼女と結婚した。

結婚式も披露宴も不要。

彼はそう言い切った。新婚生活は始まったが、義務だからと自分にも言い聞かせて羽鳥と夜を過ごした。

愛してもいないのに、自分は彼女を抱くことができるのだと冷静に思った。

一方、結婚生活を送りながら、何事にも懸命だった羽鳥は利家の人柄を段々と分かってきていた。

本当は感情を表すことは不器用で、照れ屋なのだ。

彼なりの愛情というものは分かりにくく、義務だと度々出てくる言葉が彼の生真面目さを物語っていた。

派手さはないが、端正な顔立ちの利家に声を掛けてくる女性は数多くいて、そのたびに自分には決まった人がいると言ってくれていたことは、羽鳥をホッとさせていたが、逆に利家が自分の存在を利用していても感じていた。

けれど、彼の真面目さは、羽鳥に対しても誠実なもので、彼が言葉にしないなら、自分が言葉にして愛情を表現していこうと誓ったのだ。

UNU

「おはようございます、利家さま。」  
いつになくビシツと決めている利家さま。

ああ〜なんて素敵なの！！

私は彼のために料理を作り、その前に出した。

旦那様方に出すものよりも利家さまに出す方が緊張するって言った  
ら笑う？

「君は食べないのですか？」

いつも言われない事を言われて手が止まる。

「えっ？」

まじまじと利家さまを見てしまった。

すると利家さまは、少し視線をずらしてしまった。

「わ、私は旦那様方を用意した後に・・・いただきます。」

「そうでしたね。」

いつものように優雅に箸を使って食べている利家さま。

私は軽くお辞儀をして出て行くことにした。

「あっ、」

ふと利家さまの声がして振り向く。

けど、利家さまは何もなかったように朝食を食べていた。

利家さまが食事中に余計な声を出すなんてありえないか・・・。

私は、旦那様方の朝食のメニューを気にしながら母屋へと向かった。

私は、普段笠原家のことと、古賀家の家事の事を考えている。

利家さまの妻になって、実際に古賀家の方々のために腕を振るうの  
は朝食くらいなんです。

本格的に利家さまが働くようになってから、お義母様とお義父様は  
隠居された古賀の総帥邸へと行ってしまった。

師を失ってしまったような喪失感も利家様の存在が支えてくれてる。

もちろん、大きなキッチンには数名の料理人がいるのだけど、その方々は昼食と夕食の仕込みに忙しいし、

古賀の抱える使用人の朝食を作ることも彼らの仕事なのです。

ハウスキーパーの方にお掃除や家具のお手入れを指示するのが私の仕事。

お忙しい古賀の当主様夫妻に代わって学生の彩紋さまのお世話をするのも私の役目なの。

「おはよう、羽鳥。」

「おはようございます、彩紋ぼつちやま。」

私がぼつちやまというと彩紋さまは、いつも少しだけイヤそうな顔をされるのだけど、おぼつちやまは、おぼつちやまだ。

彩紋さまは高校を卒業して大学生になっていたけど、古賀の実権のほとんどは彼に委譲されていました。

亜紋旦那さまは、奥様の静養のために海外に移住してしまわれ、古賀の方の世話と言っても彩紋さまだけになってしまいました。

けれど、高校からの御親友である神津のぼつちやまも大学が一緒だから安心です。

幼い頃から英才教育を受けてこられた坊ちやまは小学校にも通わず、家庭教師の方がついておられたと利家さまに聞きました。

高校に入って、同じ年頃の方との交流も必要だと大旦那様の言葉で高校に通うようになった彩紋さまは、

そこで神津さまと出会ったそう。

これは、利家さまのお義母さまからの情報。

「彩紋さまが、学校生活を有意義に楽しく過ごされているのはとてもいいことなのだけど、

元々のお茶目な性格に輪が掛かったみたいだわ。ボロアパートを借りたりしてるのよ。」

苦笑するお義母さま。

でも、嬉しそう。

「彩紋さまは、とてもピアノがお上手なのだ。古賀の家に生まれていなければ・・・もっと自由に。」

ある日、初めて彩紋さまのピアノを聞かせてもらったときに、利家さまがぼつりと呟いた言葉。

ふと思つた。利家さまにも別の未来があつたんじゃないかって。

「おはよう、羽鳥。今日も笑顔が素敵だね。」

彩紋さまは、いつもこんな言葉をくださるの。

「彩紋さまつたら・・・。」

彩紋さまは挨拶にいつた時には既に起きていて身支度もしつかりおわつてるのよね。

本気にしていると疲れると利家さまが漏らしたことがあつたのを思い出す。

彩紋さまは、どう言う人なのか計り知れない。

時々冗談を言つては、裏でとてつもないことを考えておいで、だんなさまもびっくりするアイデアを言つてこられる事もあるんだと利家さまが感心しておられたの。

「羽鳥い・・・。」

「はい、なんでございますか？」

ニコニコと笑顔の彩紋さま。

「年下は嫌い？」

「はい？」

ニコニコ。

「利家よりもずっと将来性がある僕と結婚し直さない？」

何を言っているのかも理解できなかった。

「冗談ではないよ？たかだが7歳差。父も母も働き者の羽鳥なら満足してくれるだろうし。」

「彩紋さま、お戯れも過ぎると怒りますよ。」

「僕のことは嫌いかい？」

すつと近くに寄つてきた彩紋さまは、私よりもずつと背が高い。

彼が冗談で言っていないのは目を見たら分かるけれど・・・。

「嫌いなはずがありませんわ。でも、これは恋でも愛でもありません。分かっておいででしょう？」

ふうつとため息を吐く彩紋さま。

その瞳に宿るのは何？

「あゝあ、羽鳥となら、おもしろい家庭が作れる思ったんやけどなあ！」

「彩紋さまにも、いつかただ1人の方が現れますわ。旦那様にとつての奥様みたいな。」

彩紋さまが鼻で笑う。

「父と母は、政略結婚だよ。ま、今はどうだかわかんないけどね。」  
悪戯っぽく笑う彩紋さま。

「ま、出会いがなければ家が選んだ適当な人と結婚して、子供作るんだろな。」

子供という言葉に反応してしまう。

「子供ですか？」

「跡継ぎね。男なんて、好きでなくても女は抱けるからね。」

結婚して2年。

私と利家さまの間にはまだ子供はいない。

あの行為は、利家さまに愛されているのかもって勘違いをしてみようになるほど、私には甘美なことなただけ。

「愛とか、恋と違って本当に必要？」

「えっ？」

気が付くと目の前に彩紋さま。

「利家のそばにいられて幸せ？そこに愛はあるの？」

「さ……彩紋さま……。」

「君を雇った事、少し後悔しているんだ。」

私が利家さまのそばにいたいと願って、その願いを彩紋さまはかなえてくれた。

「未来を決めてしまつて、振り返る事も、立ち止る事もしない利家

に羽鳥の明るさを与えたかった。

けれど、利家は変わらないし、羽鳥・・・君の笑顔が曇って行くのを・・・。」

「私は幸せです！」

力を込めて言った。

愛する人と一緒にいられて、尊敬する主人に仕えることができ、  
一方的な愛でも・・・。

つづく

「君は、古賀の家に仕えるモノとして、節度を保たなければならぬよ。」

不意に利家さまが言った。

屋敷内にある食堂で昼食を終えた私に目の前の彼が。

「えっ？」

「彩紋さまは、古賀にとってかけがえのない方です。君は、あの方にとつて一番身近な使用人のようだが、それをわきまえなくてはならない。」

何のことを言っているのだろう。

「三上が、言っていたんだよ。君が彩紋さまを誘惑していると。」

私は言葉をなくした。

三上さんって言うのは、古賀家に仕える使用人の1人で、私が来るまで利家さまの右腕といわれてきた女性だ。

主に奥様の秘書として仕えている彼女はきりりとした女性で、ポツと出の私をよく思っていないようだった。

「そ、そんな誘うなんてしていません。私は、利家さまの妻です。」

私と利家さまだけが残っている食堂に私の声が響いた。

利家さまの冷たい目……。

「そうだったね。では、三上に誤解などされないようにしてください。」

スツと立ち上がり、食堂の奥に食器を返却して行く利家さまの背中が歪んだ。

涙が溢れてくる。

利家さまに愛されなくても、信頼だけはされたかった。

だから、利家さまの言葉は辛いものだった。

視界の向こうに消えて行く彼の横には、三上さんらしき人影。

「大丈夫かい？」

そつと声を掛けてくれたのは料理長夫人。

「吉川さん……。」

「まったく、利家くんも困ったものだねえ。」

料理長も厨房から私達の様子を見ていたみたいで、出てきてくれた。「羽鳥ちゃんを見ていたら、どれだけ利家くんを好いているか分かるだろうに。」

苦笑する私。

吉川夫妻は、利家さまのお父様やお母様と同じ頃から古賀に仕えてきた人達で、

利家さまのことを御自分達の子供のように思ってたらしやるの。

「三上さんもねえ……。また利家くんに未練でもあるのかねえ。」料理長の言葉に思わず身構えた。

奥さんが料理長の肩を叩く。

「未練？」

「ほら、あなた……。」

大きなため息を吐く2人。

「気、気にせんととき？」

苦笑する料理長。

「吉川さん……何を知ってたらしやるのですか……。」

「いや、昔の事だよ。」

そそくさと厨房に戻って行く料理長。

私は奥さんの方に向いた。

「そうそう、昔の事。羽鳥ちゃんは、何も心配しなくていいんだよ。」

奥さんも厨房へと戻っていった。

三上さんと利家さんの間には、私の知らないことがあるんだ。

そう思ったら、胸の奥がきゅっと痛くなった。

屋敷の掃除をしているハウスキーパーに指示を出している間も利家さまと三上さんの過去が気になっていた。

「どうしたんですか？」

声を掛けてきたのは古賀家と契約しているハウスキーパー会社“光”の社員の横橋くん。

たしか私と同じ年でハウスクリーニング“光”の跡取りだ。

「えっ？」

「顔色が悪いですよ。」

きつと変なことを考えていたからだろう。

「大丈夫です。それより、明日は、庭ですね。」

「え・・・ああ、そうですね。庭師の埴さんの指示を待つて掃除します。それより・・・羽鳥さん・・・今晚、お暇ですか？」

彼の最後の言葉が遠かった。

「えっ？」

「ですから、今晚一緒にお食事でもいかがですか？」

「ありがとうございます。けれど、夫も忙しいですし・・・時間的に無理だと・・・。」

「違います。僕は、あなたと2人で食事に行きたいんです。」

男の人に食事の誘いを受けるなんて初めてだった。

けれど、その誘いを受ける事はできない。

だって、忙しいし・・・私には利家さまだけだから。

つづく

「あら、行つてらしたら？」

ふいに声がかかった。

振り向くとそこには、スーツをびしつときた三上さんが立っていた。「利家さんのお食事は私が用意しますわ。もちろん、台所をお借りすることになりますけど、2人きりで話がしたいと思ってましたの。羽鳥さんが出掛けて下さると利家さまも安心して私と話ができると思つんですのよ。」

絶対拒否をすると言わんばかりの視線が私に刺さる。

「ね、横橋さん。羽鳥さんのことよろしくね。利家さんには私が伝えておきますから。」

三上さんはハイヒールの音を響かせながら去っていった。

「あ、あの…三上さんと旦那さんは…。」  
横橋くんが考えたくもないことを言った。

「す、すみません。俺、本当に…羽鳥さんのこと…。」

伸びてくる彼の手を避けた。

どんなに思われても私には彼だけだ。

そして、私に触れていいのは彼だけなんだ。

「ごめんなさい。」

彼の言葉を切った。

私はその場を逃げるように離れた。

どれ位古賀の庭にある池の前で立っていたのだろう。

日は暮れ、冷たい雨が降っていた。

視線の端にある私と利家さまの家。

明かりがついている。

きつと三上さんと会ってるんだ。

泣きたくても涙を雨が消して行く。

どんどん重くなってくる体。

これ以上立っついても明日の仕事に差し障る。  
仕事をおろそかにするなんて、利家さまが許すはずない。  
タダでさえ、彩紋さまのことで誤解を受けてるし、三上さんがきつ  
と横橋さんと私が食事に行ったと彼に言ってると思う。  
夫のある身なのに、他の男性と2人で食事なんて、利家さまは、私  
のことを節操のない女だと思いはしないだろうか。  
私は家の勝手口からそつと自分の部屋に入った。  
一階のリビングから聞こえる三上さんの声が耳につく。

「羽鳥さんは、横橋さんとお食事ですつて。」

私はここにいる。

「羽鳥さんも満更じゃないって顔してたわ。」

そんなことない。

私はここにいるのに…。

「そつ。」

低い利家さまの声。

そんな言葉信じないで。

声を出しリビングに入って行きたかった。

けど、足がすくんだ。

「で、君はいつまでここに？」

「あ、あなたのために食事を作ろうと…。」

「結構です。お引取りを。」

利家さまの言葉に我耳を疑った。

つづく



「ここは、私と羽鳥の家で、あなたの場所は生憎と存在しません。」  
毅然とした声。

「そんなつれないことを言うの？ 私達は結婚の約束までした仲じゃない……あの子が、貴方は私を選んだはずよ、そう、あの子が現れなかったら……。」  
結婚の約束？

目の前が暗くなる。

「ありえない。」

また利家さまの声。

「君は家庭に、そして、古賀に仕えることに何も感じていない。お金だけだ。君は古賀よりも金を惜しみなく出してくれる場所があれば、何の迷いもなくそつちを選ぶ人間だ。」

淡々と語る利家さまの声。

あのトーンは仕事モードの時だ。

「な、な、何を言うの！私は！」

利家さまのため息がここまで聞こえた。

「私が羽鳥と結婚したことで少しばかり、仕返しをしたかったのだろうが、私もそろそろあなたと古賀を切り離れたかったです。」  
カサカサと何か紙の音。

「ここにあなたが三塚へ流した総帥のスケジュールがあります。」

三塚っていうのは、古賀財閥傘下の御三家の1つだと聞いている。

親戚関係にあるお家だ。

「な、なんのこと？」

三上さんの声の調子がおかしい。

震えてるの？

「おかしいと思ったのです。日本に帰ってきた総帥の行くところに必ず三塚氏の姿があるのは。」

「ぐ、偶然よ…そ、それに三塚にだって情報網はあるわ。」

「ええ、しかし、あまりにもプライベートな場所にも現れるのでね。あれでは、総帥が三塚氏を懇意にしているように見えてしまう。」

利家さまの声がいつになく冷たく聞こえた。

「三塚氏は立派な人だわ。古賀のことを誰よりも考えている。」

「そうでしょうね、彩紋さまを差し置いて古賀の頂点を目指してらっしゃるようですから。」

えっ？そうなの？

「そ、それは…三塚氏が彩紋さまの若さを分かってらっしゃるから…。」

「あなたは、三塚氏の愛人でしょうか？証拠は拳がってるんですよ。」

また紙の音。

「い、いつの間に…。」

「私が結婚してから、少し意識が羽鳥の方に行ったことを察したのでしょうか。露骨に行動しすぎなんですよ。あなたの処遇は後ほどご連絡しますから、三塚氏に私の言葉をそのままお伝えしなさい。きつと、助けてくださいますよ。」

ドアの向こう側にいる利家さまの言葉がとても怖い気を孕んでいることが分かった。

本当に怒ってる。

怖い…。

数秒後、ものすごい勢いで玄関のドアが開く音がした。

きつと三上さんが出て行ったのだ。

私は、呆然としていた。

三上さんと利家さまは何でもなかったの？

「何をしてるのです？」

耳元であの低い声がして飛び跳ねた。

つづく



「と、利家さまっ！えっ、あっ、あのっ！」  
と、利家さまが、わ、私をお姫様抱っこした！  
嘘っ！

「静かになさい。風呂場に行きます。」

「あ、あの…。」  
軽々と私を運ぶ利家さま。

あの細身の体の何処にそんな力が！！

「雨に濡れたまま、何時間いたのです？身体が冷え切ってますよ。」  
風呂場の脱衣所に着いた私達。

利家さまは、そっと私を下ろすとあれよ、あれよと言う間に服を脱がしていく。

「濡れた服というものは、脱がしにくいものです。協力を。」  
「は、はい。」

最後の一枚に手をかける利家さま。

いや、ちよっと、待って。

「羽鳥？今更照れなくてもいいんですよ。私はあなたの全てを知っているのですから。」

真っ赤になったと確信できる。

だって、利家さまが、こ、こんな言葉を言うはずなんてない。

「また、呆けた顔をして、可愛い人だ。」

押し込められるように全裸になった私は風呂場、シャワーの前に立たされた。

ギョツとなった次の瞬間、暖かいシャワーが足に掛かった。

「しばらく、待ってなさい。」

利家さまの身体が離れた。

あれ？なに？

利家さまなの？足先に当たる湯がだんだんと実感できたころ、不意

に背中から抱きしめられた。

「と、利家さま？」

彼の手が私のお腹から胸へと上がってくる。

「あ、あの……。」

「やっと、危惧していたことが今日決着したのです。頑張った私にご褒美を……。」

「ご、御褒美って、何ですかっ！」

くるりと向き合うところには、利家さまの綺麗な身体があった。

「ご褒美……って、何ですか？」

彼の顔が近づいてきて、私の唇を塞ぐ。

あまりにも突然のキスだったから、目は開いたままだったけど、深くなるキスに私の瞼は閉じるしかなかった。

彼の腕に捕まっついていないと倒れそうになるような深いキス。

こんなキス知らない。

やっと離れた利家さまに抱きしめられながら、身体の隅々を洗われる。

「ご褒美は、愛する妻との子供です。」

「あっ、愛するっ！」

ギョツとした顔を見たのだろう。

利家さまは、ふっと軽く笑った。

「三上さんは中々尻尾を出してくれなかったんですよ。」

「えっ？」

誘導されて湯船に浸かる。

2人で一杯になった湯船から湯が溢れ出た。

「元々、怪しかったんです。古賀に入った経緯から。そして、彼女が亜紋さま付きになってからというもの、三塚氏が否応なしに現れるものだからね。」

彼の唇が首筋をなでる。

「三塚氏は、偶然を装い、亜紋さまが一人で楽しもうと思っていた料亭にまで現れた。そして、誰も知るはずのないことを言ったので

す。」

彼の手が私を愛撫する。

利家さまの言葉を聴きたいのに集中できない。

「亜紋さまが、蘭菊さまのことで近々引退を考えていることを知っているだろうか？」

うなずくしかできない。

蘭菊さまは、亜紋さまの奥様で、対外的には“みゆ”さまと言う名前ですごされている。

蘭菊さまは優しすぎるが故に心を2つに分けてしまわれた。

その症状がここ最近酷くなっているのだと亜紋さまは悩んでらした。蘭菊さまの心が分かれてしまった原因を作ったのが自分だと思われるから。

「彩紋さまは、まだ、大学生だが、十二分過ぎるほど古賀の仕事をこなされている。あの方ほど、古賀にふさわしい方はいない。」

そう、だから、亜紋さまは、蘭菊さまのそばにいようと考えたの。「その引退のことを三塚氏は知っていた。みゆさまの御病状まで。

近しいものが情報を漏らしたとしか考えられなかったんです。」

彼の手が私の足をなでる。

「あつ…。」

自分の声が風呂場に響いて唇をかみ締めた。

「声を殺さないで…聞かせてください、羽鳥。」  
だめ…名前を呼ばないで。

「笠原家の人間として、その情報を彼に漏らしたのが誰なのかをずっと探っていたのです。ですから、羽鳥、君の相手をする時間が少なくなってしまうんです。」

「と、利家さまは、三上さんの言うことを真に受けてらしたわ…。  
私が彩紋さまに…。」

指が奥に入ってきて、湯船の淵を掴む手に力が入った。

「敵を騙すには、まず味方からだと言うでしょう？あなたを傷付けるつもりはなかったのですが、あなたに愛されると分かって嬉し

「かったですよ。」

最後の方は意識がおかしくなって聞こえなかった。

「大丈夫ですか？少しのぼせてしまいましたね。」

ひんやりとした手が額に置かれた。

ベッドに横にされた私を覗き込む利家さま。

「わ、私…利家さまにとって、ちゃんと妻ですか？」

そう尋ねた私に利家さまはにっこりと笑って見せた。

「ええ、もちろん。あなたほど、私を愛してくれる人はいないでしょう？」

「ずるいいい方だ。」

「彩紋さまの戯言も軽く交わせるんですから、大したものですよ。」

「ニコニコしてる利家さま。」

「いったい、どこまで知ってるの？」

「彩紋さまや古賀の方々が心配しているように、私には結婚は無理だと思っていたんです。」

「いつになく、寛いだ風に見える利家さま。」

「な、何ですか？利家さまは、素敵です。きっと、私なんかより綺麗で…。」

「そつと指が唇に触れた。」

「自慢じゃないですが、私は性格が悪いのですよ。こと、古賀に対する人々に関しては。」

「…。」

自分で言ってしまうことが凄いです。

「その人を古賀から遠ざけるためなら、味方も平気で騙すほどに。」

「ですから、私を通して古賀に近づこうとする女性にも辛辣なんです。」

「首をかしげる。」

「三上さんも、一度は私から離れていった人です。気に入らなかつ

たので、振られて差し上げたのです。プライドの高い女性は振られることに慣れてませんから、もし振ったとなると古賀にとって不利益になることをしでかすかもしれません。」

ちゅっど頬にキスをされる。

ですから、今までの利家さまなら、こんなことはしないです！って。「再び近づいてきたのは、三上さんが初めてだったんですよ。だから、今度は遠慮なく振って差し上げようと思ったのです。秘密漏洩の件もかねて。」

利家さま？私の問いの答えをください。

じっと見つめる。

どうして、尋ねたいのに、言葉が出ない。

優しい利家さまに期待してしまってる私がいるからだ。

「私は自分のことをよく分かってますからね、私のような人間にまっすぐ告白してきた人間はあなたただけでしたし、観察して見るとどうやら裏表もない。面白い方だと思ったのですよ。まあ、周囲があなたを私にと押していることは解せなかったのですが、」

利家さまは私の隣に横になって私の髪で遊んでいる。

「あなたの真面目な働き振りと奥様に対する思いやりを見て、素敵な方だと思っただけです。好きですよ、これは、愛でしょう？」

ニコニコと笑う利家さまの顔がゆっくりと近づいてきた。

つづく

「できない、できないと思っているとできないものなのに、あきらめた途端できちゃいましたね。」

4年目の秋に私は彰利という可愛い男の子を産んだ。

利家さまの幼少の頃にそっくりだとお義母さまが言ってくれた。

「これで笠原家も安泰だ。」

お義父さまの言葉にほっとしたのは本当だ。

「羽鳥にはもつと、もつと子供を生んでもらいますよ。」

「利家さま……。」

三上さんの件が片付いて以来、利家さまは変わった。

対外的には冷静沈着で冷たい感じなのは、変わらないけど、身内には優しい表情を見せるようになったと思う。

「当たり前でしょう？羽鳥。この子だけに笠原家の重圧が掛からないようにするには、あと、4人はほしいですね。」

初めて利家さまが私に望んだこと。

だって、思い返してみても、プロポーズらしい言葉もなかったまま、婚姻届を出したから。

結婚を義務だと利家さまは考えているのだと思った。

だから、子供に対する愛情を感じて私は嬉しかった。

「仕事ももつと頑張って羽鳥が楽に暮せるようにしていきますからね。」

利家さまは、黙々と仕事をこなしては、夜中遅くに家に帰って来た。

「お帰りなさいませ、利家さま。」

いつものように出迎えた私にはいつもの表情の利家さまの上着を受け取り、後についていった。

(どうなさったのかしら？纏う雰囲気何かちがう……。)  
表情は相変わらずなのに、何故かしら……。

「彰利は……。」

ハツとなり、笑顔を返す。

「よく寝ております。」

「そうか……。」

ワインセラーからワインを出す利家さま。

利家さまの趣味はワイン。

だんな様からもらったものを集めるのが趣味とっていいかしら。それをいつもは眺めている事が多いのに、今日は何故かしら封を開けてグラスに注ぎ始めた。

「何かおつまみでも……。」

そう言った私に利家さまは、手で制した。

「ありがとう。…亜紋さまが、とうとう決意なされた。」

寂しそうな顔。

「えっ？じゃあ……。」

「蘭菊さまがお好きなドイツに居を構えるらしい。」

お慕いしている亜紋さま、蘭菊さまが日本を離れていく。

先に静養ということでヨーロッパに旅立った蘭菊さま。

亜紋さまは、本当に心から奥様を愛してらっしゃるから、行ったり来たりの生活に終止符を打つ気になったのだけ。

利家さまには、辛いことだろうと思う。

「ついて行かれないのですか？」

「まあ、私には彩紋さまを見届ける義務もあるからね、あの方のこと、そして、あの方の未来をそばで見たいという思いの方が強いのですよ。さあ、もう夜も遅い。羽鳥、君は彰利のそばに。」

そう言われては逆らえるはずもなく……私は寝室へと引き上げた。

次男の鳥彌が生まれたとき、利家さまは仕事の調整を済ませて、病院に駆けつけ、私を抱きしめて、人前だと言うのにキスをしてくれた。

2人目だというのに、今回はかなりの難産で利家さまの心配様は、

仕事も手につかないほどだったのだと彩紋さまがからかうように言った。

「笠原は、羽鳥が心配でたまらなかったようですね。」  
彩紋さまの言葉にそっぽを向いてしまふ利家さま。  
年を重ねる毎に利家さまの愛情がやさしくなつたと思う。

鳥彌が生まれる1年前に彩紋さまが結婚をした。

大恋愛の末に結ばれた2人に利家さまもちろん、私も大喜びだった。

「さすがは、彩紋さまです。」  
選ばれた女性はとても素敵な知性のある女性だった。

お2人がとても愛し合っているのに中々子供が生まれないことが気になっていた私と利家さまは、3人目を身ごもつた時、2人でどうすべきか悩んだ。

「生まれてくるべき子供をリセットしてしまおうなんて考えたら、  
追い出すよ。」

けれど、彩紋さまにそう言われて、生む事を決めた2人のもとに生まれたのはまたもや男の子。

誠「まこと」とかいて、“せい”と読む子は、とてもやんちゃで笠原家だけでなく、古賀家を明るくしてくれそうだと思った。

そして、4男、恭介が生まれて、女の子が欲しいと思っている私と利家さまは苦笑するしかなかった。

けっして、恭介を疎んでいる訳ではないのだけれど、一人くらい女の子が欲しいものかわか思ったり。

それから後、彩紋さまは御親友だった神津さまの子供である7歳の朔夜さまを養女とされました。

あのお優しく明るい神津さまがもういらっしやらないなんて、信じられないことでした。

悲惨な事件に巻き込まれて御両親を失つた朔夜さま。

とても愛らしく聡明なお子様で、惜しめない愛情を注ぐ彩紋さまと美鶴さまに、笠原家もバックアップ体制を整えることになんの躊躇もありませんでした。

そして、娘が欲しいと常日頃思っていた私にとっても朔夜さまはとても愛しい方となったの。

その次の年、跡取りである雷紋さまが生まれた時にはソレはもうお祭り騒ぎで、朔夜さまのご自身がお姉さまになるということにとっても喜んでらして。

と喜んでいたら、また妊娠。

お腹の中には5人目の赤ちゃんが・・・。

今度こそっ！と思った子が男の子だと分かったとき、利家さまは私の年齢のことも考えて、子作りはこれで最後としましょうと苦笑して言った。

「もちろん、愛し合うことはやめませんがね。」  
とあの優しい笑顔とともに。

おわり

## 8 (後書き)

とりあえず、笠原家当主のお話はこれにて。スピノフなので、何のことやらな感じはヒシヒシとあったと思いますが、サイト運営をする上で何か変化が欲しかったんだと思います。ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5942t/>

---

執事様の恋心

2011年5月29日20時47分発行